

太宰府天満宮の梅

梅は、奈良時代（710-794）に中国から日本に伝わった。梅は朝廷の役人達によって太宰府にもたらされ、特に歌人でも学者でもあった菅原道真（845-903）公は梅の花を愛した。死後、道真公は太宰府天満宮に祀られ、梅の花は天満宮と太宰府のシンボルとなった。

9世紀当時、梅を栽培し、観梅会を催すことは高尚な文化的営みであり、道真公はそれに深く傾倒していた。太宰府への左遷のため京都を去る前に、彼は庭の梅に宛てた有名な歌を詠んだ：

東風吹かば

匂いおこせよ

梅の花

主無しとて

春な忘れそ

春の風が吹いたら

香りを届けてほしい

花開く私の梅よ

主人が居なくなったからといっても

春が来ることを忘れるな

伝承によれば、道真公が去った後、この梅の木は道真公がいないことに耐えられなくなってしまった。

根こそぎ一夜で道真公のいる大宰府へと飛んでいったことで「飛梅」と呼ばれるようになったという。太

宰府天満宮の本殿前にある大きな梅の木は、この梅の木だと言われている。6月の特別な式典で

は、神職や巫女がこの梅の実を集め、天神様のご加護をもたらす特別なお守りを数量限定で作る。

道真公と梅にまつわるもうひとつの逸話に、道真公が太宰府に到着した後、飢えに苦しんでいた時の

ものがある。その時、親切な老女が梅の枝に餅を刺して持ってきてくれた。今日、この老女の厚意は、

梅ヶ枝餅という太宰府の名物に偲ばれている。餡が入った米粉の団子の表面に梅の花の形を焼き

付けたものである。

太宰府天満宮の梅の木の多さは、天神様への敬愛の表れである。

境内には約200種6,000本の梅の木があり、1月下旬から3月上旬にかけて、庭や散歩道を紅

白の花で彩る。

太宰府天満宮では、梅の枝を持って巫女が舞う「梅花祭」（ばいかさい）や、春の花の下で歌合が

行われる「曲水の宴」（くすみのえ）など、梅にちなんだ祭りが数多く行われている。

現在、梅の花は太宰府天満宮のシンボルであるだけでなく、太宰府市や福岡県のシンボルでもある。

太宰府市では、地域の家の庭先に梅の木が植えられており、街の文化の固有な部分となっている。